

行動発達の原点としてのリズム能力

～運動、音楽、言語をつなぐコーディネーション能力～

音楽は、どのような分野でも、身体とのかかわりが重要となっています。楽器演奏のことであれば、なるほどと思われるでしょうが、声楽にしても作曲にしても、その本質には身体が大きく関わっています。その仕組みはというと、音楽の構成自体が身体の構成や動きと連動するというもので、声楽でも単に声を出す発声という運動にかぎらず、身体全体から醸し出される姿勢や緊張などが歌声の質を大きく左右するというわけです。

よく、声楽では、「腹から声を出す」ということがいわれますが、このことは呼吸に関わる横隔膜から骨盤にかけての動きが喉もとの動きの調整と深くかかわっていることが背景にあります。そして、同時に身体運動そのものがリズム的な要素とつながり、しっかりとしたリズム感を形成しながら個性的かつ創造的な表現ができることとなります。小さな赤ちゃんから幼児にかけては、身体を絡めたリズム感が確かな身体運動を導いていくことになるわけです。

また、身体運動に限らず、言葉の学習にも大きく関係していることも指摘したいと思います。話すことと音楽は別ものだと思われるでしょうが、決してそうではなくコーディネーション能力としては共通しているといえます。つまり、言葉にしても、身体の動きにしても、これにリズムが加わる、これにテンポの変化が加わる…といったことが、赤ちゃんの意味不明な発話が歌になり、音楽になる。その一方で、発声の調整が身体運動へと発展していくことになるわけです。コーディネーショントレーニングにおいては、身体運動とともにコミュニケーションや音楽に関係するプログラムが含まれている理由は、この点にあります。運動、音楽、言語をつなぐのがコーディネーション能力としてのリズム能力です。

さらに重要な点を加えると、以前から触れてきた赤ちゃんの「ぎこちない動き」のことです。少なく

とも、「ぎこちない動き」ということは、個々の部分では何らかの動きができる、しかし、まとまりがないということになりますよね。それでも、外からの「リズムの刺激」によって一気にまとまり始めることになるわけです。

そこで、まだ言葉がしゃべれない赤ちゃんに声をかけるときのことを思い起こして下さい、赤ちゃんに声をかける時の発音、イントネーション、言葉それ自体の内容のことです。しっかりと言葉が交わせる幼児に対する声掛けとは異なりますよね。赤ちゃんに合わせるようなイントネーションによって、赤ちゃんは、その言葉の感覚を得て、次第にその意味を理解することになります。こうして、リズム感が少しずつ形成されると、全身的な動きにおいてもパターンとして意味のある動きがみられるようになります。幼児教育の中で、その多くは「お遊戯」といわれる音楽性に関わっています。しっかりと喋れて、しっかりと身体を動かすために、この赤ちゃんの時に芽生えたリズム性を、さらに伸ばすという考え方があるからでしょう。

こうして、赤ちゃんは、リズム感覚をもとにして、様々なことを学んでいくわけですが、ここで、「ぎこちない動き」が、後に非常に重要となります。そして、スポーツにおける「早期教育」での失敗の原因も、このことに関係している…。このことが次回のテーマとなります。

